

しらかべ



2018年3月19日 人権・同和教育部発行

春暖の候、保護者の皆さま方におかれましてはご健勝のことと存じます。今年度も本校の人権・同和教育にご理解とご協力をいただき厚くお礼申し上げます。そして、「しらかべ」をお読みいただいた感想や本校の人権・同和教育の取り組みについてのご意見などについて、懇談などで返信いただき、ありがとうございました。来年度も変わらぬご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



✦ 踏み出す一歩～本校生の読書感想文より（一部抜粋）～

書道部員として障害福祉サービス事務所「野の花」の夏祭りイベントで、書道パフォーマンスをした。誰もが笑顔で対応してくれて、とても楽しい時間を過ごす中で、自分が勝手にイメージしていた障がい者と、訪れるお客さんに笑顔で対応している人たちはまるで逆だった。帰宅して、家族に夏祭りの話をしたとき、正直に感じたそのギャップを打ち明けた。話を聞いた母は、「お母さんに障がいのある子が生まれたとして、お金をたくさん残してあげても何かが違うと思う。やっぱりその子なりの自立をしてほしいかな。野の花みたいに自分のできることで働ける施設があったらいいな・・・」と話し始めた。その中で私がハッとした言葉、それは「自立」という言葉だった。

そういう思いで私が手に取った本が『虹色のチョーク』だ。この本の舞台は、日本理化学工業株式会社。ガラスやホワイトボードなどツルツルした素材に書くことができる筆記用具「キットパス」を製造している。作業員のほとんどは知的障がいがある方で、その半数近くは重度の障がいがある。そんな方たちの家族の思いが綴られた章の中で、あるお母さんの言葉に引きこまれた。「自分の子どもに障がいがあると知った時の衝撃は、それまでの人生が覆るほどのものです。どうして何故と泣いて過ごし、それを繰り返しました。しかし、泣いても現実は何も変わらない。子は生きていて成長するのだから」と気づいたという。お母さんは「知的障がいのある長男のことで次男に負担をかけまいと決めている」と語り、「私が死んでしまった後、一人でどうやって生きていくのだろうと心配です」とも言っている。「何とか一人で自立して生きていける方法を考えていきたい」と決意している。私の母の話と全く同じだ。子どものことを大切に思うお母さんならみんな同じように考えるのかもしれない。この本では昨年7月に起こった「津久見やまゆり園」のことも触れられていた。その犯人の言葉の中に「障がい者なんていなくなればいい」とあった。しかし、障がいがある方は周りの人を不幸にしたり、一方的にお世話されるだけの存在ではないのではないか。私の祖母は足が不自由で、外出する時も車いすを使う。買い物に行くときも車いすで、その日は私と母が一緒だった。買い物を終え、車に乗ろうと立ち上がった祖母を支える母がよろけ、祖母が母を支えた。「あれ、今、なんか逆よね。」とみんなで笑った。きっとこういうことなのだと思う。障がい者を助けていると思っても、逆に支えられていることもたくさんあるのだと。日本理化学工業株式会社の外観は、まるで大きなキャンパスのように、虹色の線をいくつも重ね、花や昆虫や星や雲や人の顔を描き出しており、三階の窓の隅々まで広がる色彩に心を奪われるという。外観のイメージそのままに、そこで働く人たちは、みんな生き生きと輝いていた。私が出会った「野の花」の人たちを思い出す。働くことで社会とつながる喜び、責任を持って仕事を成し遂げることで感じる達成感や自分への誇らしさ。障がいの有無に関わらず、誰もが求めるものではないだろうか。しかし、健常者なら当たり前のよう求め、手にすることができるものでも、障がいのある人にはそうでないのも現実なのだ。だからこそ、「野の花」や「日本理化学工業株式会社」のような場所が必要なのだろう。今回、「野の花」へ行き、直接触れ合うことを通して、障がいがある人について以前より

は少しだけ理解を深めることができた。また、関心を持って本を読んだ。障がいがある方だけでなく、ご家族の思いにも触れ、さまざまなことを感じた。自分のこれまでの偏見を恥じ、知ることの大切さを改めて感じることができた。誰もが自分らしく生き生きと生きられる社会の実現のための第一歩は知ることである。この一歩は小さいけれど、大切な一歩として進んでいきたい。

1 年生 3 学期の人権・同和教育 LHR

2 学期は「ハンセン病回復者をとりまく問題」について、LHR 運営委員が 7 月に実際に訪れた大島青松園での学習成果をもとに差別について学び、考えました。そして 3 学期は障がい者スポーツの世界についての講演会が開催され、新しい視点から障がい者差別について考えることができました。

またインターネットと人権について、「あの空の向こうに」という短編ドラマの視聴しました。あまりにも携帯電話、スマートフォンが身近なものになってしまい、その危険性についてどうしても注意が薄れがちです。自分自身が、加害者にも被害者にもなりえることをいつも心にとどめていなければなりません。

🌈 ～障がい者をとりまく問題について考える～

1 月 17 日に一般社団法人 日本デフバレーボール協会 日本代表男子チーム監督の鹿谷明生（しかたにあきお）さんを招いて、「デフリンピックの認知度を高めたい」と題した講演を行いました。そもそも「デフリンピック」って？「デフバレー」って何？というところから元気よく鹿谷さんの話が始まりました。「デフ」は聴覚障がい者のことで、デフによるオリンピックという意味でデフリンピックという世界大会が 4 年に一度開かれています。認知度の高いパラリンピックには聴覚障がい者の参加が認められていません。他の障害に比べて身体能力が高いという理由によるものです。かといって、健常者とオリンピックの場で戦おうとするには余りにも不利です。こうした中で発展したのがデフリンピックであり、その中で鹿谷氏はバレーボールの日本代表男子チームの監督をされています。



「見えれば大丈夫では？」とはじめは思うでしょう。でも講演を聴き、実際デフバレーの映像を視聴するうちに、音がない中でスポーツをする怖さや難しさを想像できるようになりました。日本代表チームの選手たちがいかに凄いかを理解できたようです。以下に、生徒の感想の一部を紹介します。

- 鹿谷氏の「自分たちのしているのはただのスポーツではなく超スポーツだから自信を持て！」という言葉にとっても感動しました。
- 健常者が生活しやすくするために障がい者の方に我慢してもらっていることがあると思うから、それに気付いて、しわ寄せを取り除きたいと心から思う。
- 鹿谷さんは耳が不自由な人たちをまとめているのに、あんなに陽気な性格でいいのかな、と思ったけれど、私たちと何も変わらない接し方で選手と向き合っているからこそ、チーム全体が明るくなり、居心地もよくなるのかなと思いました。

また、「聴覚障がい者の方は会話をする時、何度も聞き返したら迷惑をかけるからと、自然にわかったふりをしてしまう」という言葉が非常に生徒の心に響いたようで、感想文にも多くかかれていました。障がい者だからできないのではなく、環境や周りの人間のほんのちょっとした共感から埋まる溝がたくさんあることを学べたのではないのでしょうか。